

「2015年長老会神学大学校神学声明」について

ナグネ（洛雲海）

アジアの霊魂

2015年長老会神学大学校神学声明⁽¹⁾（全文）

今年二〇一五年は、韓国が帝国日本の植民支配から解放された「光復七〇周年」にあたると共に、民族の「分断七〇周年」となる年である。国内では民族の平和的統一が切実に要請され、国際的には韓半島の運命に影響を与えてきた列強諸国の動きにより緊張が高まりつつある。これに対し、長老会神学大学校教授一同は歴史を導かれる神の摂理を省察する中で、時代状況に対応する神学的座標を設定しようとするものである。アジア―太平洋時代を迎えた今日、われわれは韓国教会の時代的課題が世界の教会に仕えることにあると明確に認識する。われわれは、長老会神学大学校が改革教会の伝統である聖書的・福音的神学に基盤を置くエキュメニカル神学を志向してきたことを確認しつつ、「1985年長老会神学大学校神学声明」ならびに「2002年長老会神学大学校神学教育声明」を発展的に継承し、ここに「2015年長老会神学大学校神

学声明」を発表しようとする。本声明を通して、われわれは本校の神学的アイデンティティを確立し、また現在の社会・政治・経済・文化的状況に応答すべく本校の神学的立場と行動綱領を闡明しようとするものである。

第1命題…われわれの神学は、三位一体なる神の言葉としての聖書に証言されたイエス・キリストによる神の国の福音に基礎をおく。

新旧約聖書は、神の言葉としてキリスト神学と実践の源泉であり、あらゆる時代状況における神学と実践のための原資料かつ規範である。神の言葉である聖書は、生きておられる御言葉としてのイエス・キリストを証言し、究極的には三位一体なる神を啓示する。聖書において、われわれは父なる神を創造主として、子なる神を救い主として、聖霊なる神は終末論的完成をもたらす力の主としてこれを認識する。世界の全歴史は、この三位一体なる神の経綸の中で終末論的未來に向かって前進する。新旧約聖書の中心的内容は三位一体なる神の創造と救いの歴史にあり、特に新約聖書の核心的主題はイエス・キリストにより宣べ伝えられ実践された神の国の福音（マルコ1・15、ルカ16・16）にある。聖書にはイエス・キリストと神の国の福音に対する初期の教会の信仰告白と実践的応答とが含まれている。われわれはこのような応答を今日の状況において新しく理解し具現する神学と実践とを追求しようとする。われわれの神学と実践における中心的主題は、神の国の福音である。神の国の福音により、イエス・キリストを信じる全ての人は罪が赦され、神の子となる。われわれは改革神学の伝統に従い、ただ恵みにより、ただ信仰によつてのみわれわれが義認に至ること、また聖化へと向かう生を生きることになることを信じる。神の国は神が統べ治められる国であり、神の民の共同体である。神は万有の主、諸王の王であられるがゆえに、その統治範囲は教会のみならず、この

世の全てを含む。われわれはイエス・キリストの生と十字架また復活と聖霊の力において、この世にすでに到来した神の国を味わい、将来完成する正義と平和と愛の国を展望し、神の国の福音を宣べ伝え、神の国の実現のために献身する。こうした意味において、われわれは本校の教育理念である「イエス・キリストの福音伝播と神の国の具現」を目的とする統全的（オン）神学を追求する。

第2命題…われわれの神学は、神の平和を遂げる民族和解と韓半島の統一また世界平和を追求する。

わが民族は一九四五年の光復直後に分断され、6・25戦争（朝鮮戦争）を経て分断は固着化した。約七〇年にわたり南北韓は軍事的に対峙しつつ、体制に関わる競争を繰り広げて来た。最近では北韓のミサイルと核開発により、韓半島の危機的状況は持続・深化しつつある。南韓と北韓でそれぞれ異なる体制が構築された結果、民族の同質性は脅威にさらされている。これに加え、自国の利益を追求する強大な周辺諸国による韓半島政策は、東北アジアの平和と安全を脅かしつつある。こうした状況の中、光復七〇周年を迎えるわれわれに与えられた優先的課題は、南北韓の葛藤解決、民族和解の実現、民族の同質性回復にある。しかし、われわれはこれらの課題の実現に対し、これまで積極的な参与をし得なかった。神の国の福音は平和の福音である。そこでわれわれは、イエス・キリストにより成し遂げられた和解の十字架（エフェソ2・14―16）の御前で神の赦しを求め、平和の源としてのキリストに倣い、和解と平和の働き人（マタイ5・9、Ⅱコリント5・18）となろうとするものである。われわれは、韓半島の非核化と東北アジアの平和政策のための努力に全力を尽くす。また、われわれはこれらを実現するための六者会合当事国と、膠着状態に陥った南北関係の改善に努める南北韓当局者たちに対し、真の対話と行動を促す。われわれは神の国の自由・正義・和解・平和が実現する韓半島の統一を追い求め、これらの神の国の価値が韓半島ならびに東北アジアを越えて、全

世界に拡張され得るよう努めるものである。

第3命題…われわれの神学は、神の正義を具現するため、社会的弱者と小さき者をいたわる公共性を追求する。

新自由主義経済体制の下で、社会経済の両極化はますます深化しつつある。その結果、社会の全領域において社会的弱者の被る苦しみが増大しつつある。競争力が絶対的価値となることで競争から取り残された弱者は非人間的な生を営むこととなり、家族の崩壊や自死などの悲劇が起こりつつある。われわれの社会には、解決すべき諸問題が山積している。貧者はますます貧しくなり、富者はますます富むという現象、富の偏重による教育の不平等、生計型自営業者たちの破産、非正規雇用の問題などにより、社会的葛藤が増大しつつある。脱北者（北韓離脱住民）、多文化家庭（国際結婚や移住民による家庭）、外国人労働者たちに対する偏見や差別は社会的統合を阻害しつつある。われわれの社会は、人間の尊厳、人間らしい生、男女平等を含む社会的基本権をいっそう保障する必要がある。こうした状況にあるわれわれは、神が社会的弱者や小さき者の苦しみに対し優先的に応答される主（マタイ25・40）であることを告白する。神の国は正義の国である。われわれを召し義とされる神は、不義腐敗の進んだ社会を改革する塩と光の役割（マタイ5・13―16）をわれわれが果たすことで、われわれを通して神の正義（アモス5・24）を実現せしめられる。われわれは社会的弱者や小さき者を助け、隣人と共に生きるという神の国の価値を具現するために、神学の公共性を追求する。

第4命題…われわれの神学は、神の生命いのちの回復と創造の秩序のために被造世界と生態系の回復ならびにその

保全を追求する。

今日、人類は環境汚染や生態系の危機に直面している。人間の貪欲と罪により、創造の秩序は歪曲され、自然破壊は進み、全被造物が苦しみのただ中で嘆息しつつある。産業文明は地球の温暖化を招来し、これによる気候変化や自然災害はあらゆる生命体の生存をおびやかしつつある。生命を軽視する反生命的文化の中で、福島第一原発事故やセウオル号の惨事などの諸事件が起こりつつある。人間と全被造物は神の被造共同体であり、三位一体なる神の似姿 (imago Dei) にかたどられた人間は被造物を保護し、これを治める僕として召された (創世記1・28)。神の国は生命の国である。われわれは受肉されたイエス・キリストの生と十字架と復活において、終末論的な新しい創造と生命の秩序とが先取りとして (II コリント5・17、ガラテヤ6・15) 到来したことを信じる。神の国は人間の救いのみならず、創造の秩序回復と生命の価値の完全な具現をも含むものである (イザヤ65・17―25、エゼキエル36・33―36)。したがって、われわれは生命を破壊し生命の価値を毀損する勢力に立ち向かってこれと戦い、生命の霊に満ちた世界の実現のために努力しようとするものである。またそのために、われわれは生態の正義に基づいた生の在り方を追求し、地と環境とを尊重する霊性を育成しようとするものである。

第5命題…われわれの神学は、神の宣教を志向する諸教会の連合と一致を追求する。

今日の韓国教会は、間断なき分裂や葛藤による甚だしい混乱と苦しみのただ中にある。物量的成長主義、利己的各個教会主義、排他的教派主義、変則的な教会の世襲などの諸問題により、韓国教会は社会から不信や指弾を受けている。こうした教会の姿は、地域の福音化や世界宣教にとつて躓きとなっている。諸教会の連合と一致は、神の宣教 (missio Dei) のためにまず成し遂げられるべき課題である。「一つの、聖なる、

普遍的、使徒的」な教会は、聖霊の力にあつて世の全ての信徒が交わるその交わりの中で連合する宇宙的信仰共同体（エフェソ1・23）であり、神の宣教に参与する宣教共同体である（Ⅱコリント12・12）。われわれは個人伝道、生を通した福音の証言、社会的責任を含む神の宣教を志向する。したがって、われわれは過去と現在を反省しつつ、更新と改革を通した教会の連合と一致を成し遂げることには力を尽くすものである。さらに、われわれは世界の諸教会に対する韓国教会の使命を自覚し、世界の諸教会の連合と一致のための運動にも積極的に参与しようとするものである。これらのことを通して、われわれは世に向つて神の愛を宣べ伝え、穩健かつ全的な福音を具現する神の宣教が成し遂げられるよう、われわれの使命に全力を尽くすものである（イザヤ61・1―3、使徒言行録1・8）。

第6命題…われわれの神学は、韓国教会の危機に向かつて積極的に対処し、その危機を克服するための教育に力を尽くす。

今日の韓国教会は、総体的な危機に直面している。韓国教会の成長は停滞しており、牧会者の道徳的な緩みや教会の対社会的影響力の減少により、量的にも質的にも困難の中に置かれている。その上、次世代への信仰継承に関する韓国教会の危機は、韓国の未来への展望さえも暗いものとしている。われわれの神学は教会の神学であると同時に、教会のための神学であることをここに確認する（コロサイ1・25）。われわれはまず、現在の韓国教会の危機が牧会者養成を担う神学校と神学教師にも責任あることを認め（ヤコブ3・1）、悲しみに心痛めつつこれを悔い改めるものである。また、神学校がこの危機に対してとってきた受動的かつ消極的な姿勢を脱皮し、積極的にこれに対処し、危機克服のための神学教育へと邁進することここに闡明する。われわれは霊性、人性、知性、牧会において力量ある牧会者と教会指導者を養成し、韓国

教会の危機を打開し得る神学教育に力を尽くそうとするものである。何よりも神の言葉に根ざしたイエス・キリストの弟子を養成し、知と生とが一致するような人格を高め、学問と現場とが分離しない神の国の働きを立て、信徒たちの信仰と生活に変化を起こすような実際の力を備えた牧会者を養育し、これを派遣する神学教育を追求する。そのために、われわれは神学教育の内容と方法を改善するのみならず、神学校教師としての召命と使命と献身とを、ここに新たにしようとするものである。

第7命題…われわれの神学は、世俗主義的文化を変革させ、神の国の文化形成とその拡散に寄与しようとするものである。

今日の人類は、世俗主義文化の中にあって生きている。人間を断片化させる個人主義は共に生きる共同体の秩序を破壊し、マモンの力は生命いのちを単なる商品や消費財へと作り替え、人間が存在と所有とを混同するよう導く。科学技術に対する信頼を絶対化する科学技術主義は、宗教に取って代わりつつある。快楽を求める物神主義は、人間に偽りの豊かさを追求めさせ、人間の精神と生の在り方を荒廃させつつある。こうした世俗主義文化には、創造主なる神の座に向かって上昇しようとする人間の罪性が染み込んでいる。この文化は、人間と被造物を罪の結果としての死の泥沼へと陥るようにする。しかし、このことは当然ながらイエス・キリストの福音の力によって変革されなければならない。われわれは世俗主義文化に対抗し、神の国の文化を追い求める。神の国の文化は、世俗主義的価値観に抵抗しつつ、政治・経済・社会・文化・芸術・教育などのあらゆる領域で神の統治が成就することを渴望する場に臨むものである（ローマ8・21）。われわれは、神の創造の秩序から逸脱して墮落した人間の文化が、イエス・キリストの贖罪による救いの恵みによって回復されることを信じる。キリストの体である教会は、この世の文化への対案的共同体として世俗主

義文化を变革させ、神の国の文化を具現させなければならない。イエス・キリストにおいてすでに先取りされた神の国は、神の義を追求するイエス・キリストの弟子たちを通して拡げられる。神の国の文化は地上においても具現され、イエス・キリストの到来によって完成されることであろう。その時、「新しい天と新しい地が」開かれ、「聖なる都、新しいエルサレムが、天から下つて来」（黙示録21・1―2）、こうして全宇宙にイエス・キリストの生命いのちが満たされる中、愛と平和の共同体である神の国は完全に成就するものとなるであろう。

二〇一五年八月一五日 光復節を迎えて

長老会神学大学校 教授一同

1. はじめに

「聖学院大学は、その精神がすばらしい大学です」。二〇一六年六月三日、長老会神学大学校チャペル・オブ・エシナツ (Presbyterian University and Theological Seminary 以下、長神大チャペル・オブ・エシナツと略)で行われた学期最後の終講感謝礼拝の際に、金明容キム・ミンヨン総長が説教の中で語った言葉である。「和解の神学」と題されたその説教で、金総長は二〇世紀に日本やドイツが引き起こした悲惨な戦争に触れ、「本当に悔い改めを必要とする人々は、他に先んじて自ら進んで悔い改めるということはまずない」と

いうこと、またそのような人々は「最後にようやく悔い改めるようになる」ものであるという世の現実を強調した。そのような文脈において語られたのが冒頭の言葉であった。自分たち韓国人の側からすれば、東北アジアとの関係において安倍政権が異常な方向へ向かいつつあるように見える日本の潮流の中で、こうした流れと闘っている人があるというのである。そして、金総長は聖学院大学の名前を挙げ、「聖学院大理事長の阿久戸牧師は、この礼拝堂で、この説教壇から赦しを乞われました」と語り、日本にはこのような精神に基づくキリスト教大学があると宣言したのであった。

長神大総長の聖学院大学に対する評価は非常に高い。その規模においては、アジアのみならず、世界的にも最大級の神学部と神学校（seminary）を擁する大学へと発展した長神大である。そのような長神大で、聖学院大学は日本で特別存在意義のある大学として認知されているのである。経済的にも軍事的にも、それゆえ政治的にも、アジアの重要性が世界的に認識されつつある状況にあつて、なお欧米偏重的雰囲気の色濃く残り、それどころか依然支配的であるようにさえ見える日本の多くの諸大学の中で、聖学院大学は特に東北アジアに目を向け、その重要性を頭で認識するのみならず、具体的に東北アジアの韓国にあるキリスト教大学との交流を模索し、これを押し進めてきた。中でも、聖学院大学は二〇〇八年に長神大と相互交流協定を結び、それ以来「日韓神学者学術会議」や「学生交流」プログラムを通して、毎年、特別の学的・人的交流を持ち続けてきた。こうした実績に併せ、これまで重ねられてきた理事長・院長・学長による韓国での発言を通して、長神大では、聖学院大学が日本の中に存在する良心として認知・評価されており、またそのことは韓国の諸メディアを通して広く紹介されてもいる⁽²⁾。

今回のこの発表の場合も聖学院大学総合研究所によつて作られた。日本では、「2015年長老会神学大学校神学声明」（以下、「2015神学声明」と略）への関心をどこよりも先駆けて強く示し、反応したのは聖学院大学である。このことは、まさに上述の流れを象徴するものである。

「2015神学声明」は、日本ではすでに新教出版社の『福音と世界』二〇一五年一二号においてその全文が拙訳を

もって紹介された。しかし、この度、聖学院大学総合研究所はこれを改めて取り上げ、さらに理解を深めようと試みている。「2015 神学声明」について理解を深めることは、単に長神大のみならず、韓国キリスト教界の大きな潮流と方向性について理解を深めることにつながる。本神学声明は、すでにヨーロッパの神学界において注目を浴び、評価も受け始めている^③。今回、この「2015 神学声明」について発表する機会が与えられたことを喜び、その作成に参加した者の一人として、心から感謝申し上げたい。

II. 背景

(1) 実現しなかった2015年共同声明発表計画

「2015 神学声明」は、二〇一五年八月一日に「長老会神学大学校教授一同」の名によって公にされた。その日は、日本にとっては「敗戦・降伏七〇周年」、一方、韓国にとっては帝国日本による植民支配からの「解放・光復七〇周年」に当たる日である。また、二〇一五年は朝鮮半島（韓半島）の南北分断からも七〇年（「2015 神学声明」での位置づけでは「分断七〇周年」）に当たり、さらに日韓基本条約締結からは五〇年となる年である。まさに二〇一五年は日韓関係史において重要な節目を迎える年であり、その八月一日は特別意味ある日であった。時に、日韓関係は、安倍・朴槿恵両政権の関係をはじめとし、諸方面において史上最悪と評されるほどに冷え込んでいた。そのような時期に、長神大と聖学院大学はキリスト教信仰と神の愛に基づく学的・人的交流の重要性ならびに正義と自由と平和を求める精神を土台とした交流の重要性を再確認し、二〇一五年八月一日に合わせて両校間で「日韓神学者学術会議」

を開催することを決定し、その場を通して両校の代表者たちによる共同声明を公に発表することを計画したのであった。ところが、諸般の事情から八月一日に合わせて開催が予定されていた「日韓神学者学術会議」は頓挫し、それに伴って長神大と聖学院大学両校による共同声明の発表計画も立ち消えとなった。併せて、「日韓神学者学術会議」も一月に延期されることになったのである。こうして、両校による二〇一五年八月一日の共同声明発表は幻に終わったのはあるが、長神大は八月一日に合わせ、独力で「2015神学声明」を発表することを計画し、これを果たしたのである。

以上のような経緯をもって発表されたものが本声明である。「2015神学声明」誕生の背景には、聖学院大学との間で実現しなかった共同声明発表の計画があったということは記憶すべきことである。そして、まさにこのことが、「2015神学声明」の誕生にとっては、一面で重要な役割を果たすこととなったのである。

(2)「2015神学声明」に至る前史としての長神大の諸声明

二〇一五年の「2015神学声明」が公にされる以前、長神大は数度にわたり諸文書を公に発表してきた。その最初は一九八五年に発表された「長老会神学大学神学声明」であり、次は二〇〇二年の「長老会神学大学校神学教育声明のための基礎文書」、そして翌二〇〇三年に公にされた「21世紀長老会神学大学校神学教育声明書」である。いずれも「2015神学声明」に至る上で重要な資料群である。以下、その内容について簡単に触れることとしよう。⁽⁴⁾

A 一九八五年「長老会神学大学神学声明」

長神大から最初に発表された神学声明は、一九八五年の「長老会神学大学神学声明」（以下、「1985声明」⁽⁵⁾）であ

る。金明容によれば、「1985 声明」の初案を作成したのは李亨基（イヒョング、現長神大名誉教授）であり、その初案は教授セミナーで修正され、その後朴昶環パクチャフワン学長主宰の教授会議において公式に追認されたのであった。⁽⁶⁾また朴昶環によれば、「1985 声明」は「包括的」なものではなく、「最も緊要にして急を要する強調すべき点のみを扱った」ものであるため、「より優れたものとして発展し修正される可能性はいくらでもある」という認識の下に作成されたのであった。⁽⁷⁾「1985 声明」は、以下の七つの命題から構成される。

第1命題…われわれの神学は、福音的であり、聖書的である。

第2命題…われわれの神学は、改革主義的であり、エキュメニカルなものである。

第3命題…われわれの神学は、教会と神の国に奉仕する。

第4命題…われわれの神学は、宣教的可能性と歴史的、社会的参与の機能を遂行する。

第5命題…われわれの神学の場合は韓国であり、アジアであり、世界である。

第6命題…われわれの神学は、既存の社会的諸問題に応答しなければならない。

第7命題…われわれの神学は、対話的である。

金明容は、この「1985 声明」の諸命題から明らかにすることとして、長神大が「一言で、統全的神学の道を歩んで行こうとするもの」⁽⁸⁾であることを挙げている。

B 二〇〇二年「長老会神学大学校神学教育声明のための基礎文書」

「長老会神学大学校神学教育声明のための基礎文書」⁽⁹⁾（以下、「2002 基礎文書」）は、長神大教授会が開校一〇〇

周年を記念して発表したものである。その序文によれば、「2002基礎文書」が基盤とするのは「一九二〇年に平壤^{ピョンヤン}の本校教授会が発表した『本校の目的と信経』と、一九八五年に本校が採択した『長老会神学大学神学声明』にみられる聖書についての強調と社会的責任についての精神」である。その教育理念は「イエス・キリストの福音伝播と神の国の具現」という二本の柱で支えられた七つの信仰告白的項目から構成されている。七つの項目は、次のとおりである。

- 第1項 イエス・キリストの福音と神の国
- 第2項 イエス・キリストの福音と聖書
- 第3項 イエス・キリストの福音と救い
- 第4項 神の国と教会
- 第5項 神の国を具現する文化
- 第6項 神の国と今日の世界
- 第7項 神の国のための神学

これら七つの項目から明らかになるのは、「2002基礎文書」は聖書を基盤とし、社会的責任に対する学生たちの精神育成を目標としたものであるということである。その教育理念は「イエス・キリストの福音伝播と神の国の具現」という二本の柱で支えられている。ここに「2002基礎文書」の統全的性格が明確に現れていると言えよう。つまり長神大は、「イエス・キリストの福音伝播」を強調する福音主義神学と「神の国」を強調するエキュメニカル神学の双方を包摂する仕方で、神学研究と神学教育を行う教育機関であるということなのだ。⁽¹⁰⁾しかし、われわれは何よりも「2002基礎文書」が「神の国」に焦点を合わせるかたちをもつて全体を構成しているという点に大きな特徴を見出

したい。長神大は神学研究と神学教育の最優先課題を「イエス・キリストの福音と神の国の福音」とする大学なのである。このことは、長神大の神学研究と神学教育が神の国のための実践的方向へと座標軸を置いているということでもある。

C 二〇〇三年「21世紀長老会神学大学校神学教育声明書」

二〇〇三年五月一三日、長神大教授一同は、開校記念に合わせて長神大の教育理念・教育目的・教育目標を明らかにする「21世紀長老会神学大学校神学教育声明書」（以下、「2003教育声明書」）を発表した。本神学教育声明書には、その序文で「2002基礎文書」に基づいて作成されたものであることが明記されている。⁽¹⁾その内容を整理すると、次のようになる。

① 教育理念とその教育内容

- a. イエス・キリストの福音と神の国
- b. イエス・キリストの福音伝播
- c. 神の国の具現

② 教育目的

- a. 神の国の民の育成
- b. 教会と社会ならびに国家に奉仕する教役者の養成

③ 教育目標

- a. 敬虔の訓練

b. 学問の錬磨

c. 福音の実践

「2002基礎文書」と比較するとき、「2003教育声明書」はその構成に違いはあっても、その内容と方向性においては「2002基礎文書」とほぼ同様であることが確認できる。双方共に、「イエス・キリストの福音伝播と神の国の具現」という二本の柱に支えられたものである点で福音主義的であると同時にエキュメニカルな性格を持ち、「神の国」に焦点を合わせて全体が構成されているという点で神の国を志向する性格を持つものであると評せよう。また、神の統治の実現が教会のみならず個人と社会そして全被造世界に対しても目指されている点で、この世に対する責任的性格を持つものであり、「神の国」の実現と拡大のための実践的方向に座標軸が置かれている点で、神の国のための実践的性格を持つものであるとも評せよう。以上のような性格ならびに志向性を持つことを統全的なことと呼ぶならば、長神大はまさに統全的な神学研究を目指し、統全的な神学教育を志向する大学と言えるであろうし、実際そのように自認しているものである。⁽¹²⁾

以上、「2015神学声明」に至る前史として長神大がこれまで公にしてきた諸声明を概観してみたが、それらはいずれも保守あるいは進歩に偏らず、理論あるいは実践に偏らず、福音的な志向あるいはエキュメニカルな志向に偏らず、個人の救いあるいは社会の救いに偏らず、イエス・キリストの福音あるいは神の国の福音に偏らず、むしろそれら両者を聖書に基づいて共に重視し志向するという点で、統全的 (holistic) な性格と志向性を持つものであると評価できるであろう。重要なことは、これらの諸文書に認められる統全的性格とその志向性がより発展的に「2015神学声明」に受け継がれ、「2015神学声明」においてより神学的に深められた点である。以下、「2015神学声明」の内容と評価をもつて、このことを確認してみよう。

Ⅲ. 「2015年長老会神学大学校神学声明」の内容と評価

すでにⅡ―(1)の冒頭で触れたとおり、「2015神学声明」は朝鮮(韓)半島の光復・分断七〇周年を期に、二〇一五年八月一日に長老会神学大学校(Presbyterian University and Theological Seminary)教授一同の名で発表されたものである。

その内容は、韓国教会の危機的状況を踏まえ、「イエス・キリストの福音伝播と神の国の具現」を目的とする「統合的神学(holistic Theology)——オン神学(Ohn Theology)」を基盤とし、韓半島の統一、世界平和、正義ならびに公共性の追求、生態系の回復と保全、神の宣教に基づく諸教会の一致、危機克服のための教育、世俗文化の変革などを念頭に置きつつ「聖書的・福音的神学に基づいたエキュメニカル神学」を志向するものとなっている。ここでは韓国教会を越えて、世界の教会に仕えることが視野に入れられ、神学を通して対社会的・歴史的責任を担おうとする使命意識に支えられている点が注目される。⁽¹³⁾

以下、「2015神学声明」の構造と内容を概観してみよう。

(1) 構造と内容

「2015神学声明」は、前文と七つの命題および命題ごとの解説によって構成されている。

前 文…時代認識、状況確認、課題、目的

第1命題…「聖書とイエス・キリストによる神の国の福音」

第2命題…「和解と平和」

第3命題…「神の正義と公共性」

第4命題…「神の生命・被造世界・生態系の「回復と保全」」

第5命題…「神の宣教 (missio Dei)」と「諸教会の連合と一致」

第6命題…「韓国教会の危機克服のための「教育」」

第7命題…「神の国の文化」形成と拡散

前文

まず前文においては、二〇一五年という年についての時代認識と国内外の状況確認、また時代状況に対応する神学的座標設定についての言及と韓国教会の時代的課題の指摘、そして本声明の目的が言明される。すなわち、二〇一五年は韓国にとって「光復七〇周年」に当たると同時に「分断70周年」に当たるという時代状況にあること、ならびに国内では民族分断を背景に民族の平和的統一が要請されていると同時に国外では列強諸国による緊張の高まりがみられるという現実について確認され、こうした時代的状況認識を踏まえて、教授一同はそれに対応する神学的座標を設定しようとする、ならびに韓国教会の時代的課題が教会に仕えることにあるということ、さらに本声明の目的が長神大の神学的アイデンティティの確立と、長神大の神学的立場と行動綱領の闡明にあるということが宣言される。

第1命題…われわれの神学は、三位一体なる神の言葉としての聖書に証言されたイエス・キリストによる神の国の福音に基礎をおく。

第1命題の核は「聖書」と「神の国の福音」である。本命題は、神学における両者の位置づけと共に、両者に対する信仰的・実践的応答への神学的追求を闡明する。また、「イエス・キリストによる神の国の福音」を神学の基礎として強調し、これを基に長神大の聖書理解と神学理解を信仰告白的に明示する。

本命題の解説では、まず新旧約聖書が「神の言葉」であること、またそれは「神学と実践の源泉」であり「原資料かつ規範」であること、さらに「三位一体なる神を啓示する」ものであることが信仰告白的に表明される。そこでは、「聖書の中心的内容」は「創造と救いの歴史」にあるとされる。注目すべきことは、「新約聖書の核心的主題」が特に「神の国の福音」にあるとされていることである。御子の十字架の死による贖罪については、ここでは直接言及されない。つまり、福音とは単に「イエス・キリストの福音」というのでも、また単に「神の国の福音」というのでもないということである。それは、福音とは「イエス・キリストの福音」とイエス・キリストによつて宣べ伝えられ、また実践された「神の国の福音」との双方を指すということを意味する。しかしながら、本命題では新約聖書の核心的主題が「神の国の福音」であると把握されたように、「神学と実践における中心的主題」もまた「神の国の福音」にあると解釈されている。したがつて、ここでは「神の国の福音」に強調点が置かれていることは否定できない。

もちろん「改革神学の伝統」に則つて、恵みによる「信仰義認や聖化」にも言及されはする。しかし、重点は「神の国」に置かれていることは明らかである。「神の国」は神が統治される国として「この世の全てを含む」ものであること、その「神の国」はイエス・キリストにおいて「世にすでに到来した」が故に、キリスト者は「神の国」を味わいつつ将来におけるその完成を展望し、その「実現のために献身する」ものであると告白される。

このように、「イエス・キリストの福音伝播」のみならず、「神の国の具現」だけでもなく、その双方を目的とし、追求する姿勢が、「統全的（オン）神学」を標榜する長神大の神学には顕著である。こうした主張の背景には、一方にいわゆる保守的神学が個人の魂の救いばかりを強調して、現実世界における社会的責任を果たそうとしてこなかったこと

に対する批判と反省があり、他方にいわゆる進歩的神学が現実世界における社会的救いばかりを強調して、個人の魂の救いを中心とした教会の伝統的福音理解をないがしろにしてきたことに対する批判と反省がある。長神大の神学は、統全的福音理解を基礎とするものである。

第2命題…われわれの神学は、神の平和を遂げる民族和解と韓半島の統一また世界平和を追求する。

第2命題の核は「和解と平和」であり、神学によつてこれを追求することである。ここでは、神学の役割としての平和追求とそのための具体的行動が強調されている。その背景として念頭に置かれている第一のものは、「韓（朝鮮）半島の分断」という、具体的・現実的・悲劇的・危機的状况である。ここでは、「世界平和」という普遍的・抽象的な事柄と共に、「民族和解」や「韓（朝鮮）半島の統一」といった個別的・具体的な事柄が「神の平和」を遂げることと一つとみなされている。しかし、なぜ神学が具体的に平和を追求しなければならないのか。それは、本命題の解説によれば「神の国の福音は平和の福音」だからであり、イエス・キリストの十字架は「和解」だからである。また、キリストは「平和の源」であられたからである。それ故に、キリストに倣う「われわれ」は「和解と平和の働き人」になろうとする者であるという自己認識が表明されるのである。しかも、本命題はこのことを単なる理念に留めず、具体的な行動へと移すことを標榜する。すなわち、「われわれは、韓半島の非核化と東北アジアの平和政策のための努力に全力を尽くし、その実現のために「六者会合当事国」と「南北韓（朝鮮）当局者たち」に対して「真の対話と行動を促す」と明記したのである。そこにあるのは、現実社会における和解と平和のための具体的行動が「神の国の価値」を全世界に拡張することになるという確信である。長神大の神学は、理論（テオリア）と実践（プラクシス）の統合を目指すものである。

第3命題…われわれの神学は、神の正義を具現するため、社会的弱者と小さき者をいたわる公共性を追求する。

第3命題の核は「神の正義と公共性」であり、神学によってこれを追求することである。ここでは、まず新自由主義経済体制下における「社会経済の両極化」という好ましからざる世の現実と、それに伴う「社会的弱者」の存在に目が向けられ、そのような現実と存在に関わる問題解決のために、「神学の公共性」を追求することが標榜される。本命題の解説では、貧しい者、破産者、脱北者、国際結婚や移住民による多文化家庭、外国人労働者など、この世で偏見や差別によって苦しみ、非人間的な生を営まざるを得ないような人々の存在を看過しまいとする姿勢と同時に、そのような人々を助け、そのような人々との共生を目指そうとする姿勢が強く打ち出されている。それはまず「神の国は正義の国」だからであり、また、そのように生きることが「神の国の価値」と等価とされ、「神が社会的弱者や小さき者の苦しみに対し優先的に応答される主である」と信じられるがためである。そこには、神がご自身の正義を「われわれを通して」実現される方であるとの確信と、またそれは社会改革という役割を「われわれが果たすことで」実現されるものであるとの確信がみとれる。長神大の神学は「社会的弱者や小さき者」の側に立ち、彼らを助けることを通して「神の国の価値」を抽象化せず、むしろ「隣人」との共生を通して、この世における「神の正義」の具現化を目指すものとするものである。「神学の公共性」を追求するのそのためとされるほどに、弱く小さき者を大切にしようとする価値観と姿勢が、長神大の神学には明瞭である。

第4命題…われわれの神学は、神の生命^{いのち}の回復と創造の秩序のために被造世界と生態系の回復な
らびにその保全を追求する。

第4命題の核は、神の生命・被造世界・生態系の「回復と保全」であり、神学によってこれを追求することである。ここでまず注目される世の現実的状況は「環境汚染や生態系の危機」である。本命題の解説では「気候変化や自然災害」を招来する「地球の温暖化」も、「福島第一原発事故やセウオル号の参事」も、その原因はひとえに「人間の貪欲と罪」にあるとみなされている。

ここではある種の人義論——神義論 (theodicy) ならぬ人義論 (anthropodicy) ——が展開されている。すなわち、環境汚染や自然災害の要因となるのは「生命を軽視する反生命的文化」であり、これが形成されるのは「人間の貪欲と罪」によるのであって、それが「創造の秩序の歪曲」や「自然破壊」の進展をもたらすことになるという見解である。環境問題は人間の罪の問題と関わるということである。そこで、本命題の解説は「人間と全被造物は神の被造共同体」であること、また人間はこの「被造物」の保護と統治のために僕として召された者であることを確認し、同時に神の国は「生命の国」であること、またその国は「人間の救いのみならず、創造の秩序の回復と生命の価値の完全な具現をも含むものである」ことをも確認する。このような神の国の具現のためにも僕として召された者であるがゆえに、「われわれは」「生命を破壊し生命の価値を毀損する勢力」との戦い、「生命の霊に満ちた世界の実現」のための努力、「生態の正義に基づいた生の在り方」の追求、「地と環境とを尊重する霊性」の育成に励むものであることが表明されるのである。長神大の神学は、J P I C (正義、平和、創造秩序の保全 Justice, Peace, Integrity of Creation) の価値観を支持し、推進し、これに基づいた生を目指すものなのである。

第5命題…われわれの神学は、神の宣教を志向する諸教会の連合と一致を追求する。

第5命題の核は、「神の宣教 (missio Dei)」と、そのための「諸教会の連合と一致」であり、神学によってこれを追求することである。本命題の背景にあるのは、「今日の韓国教会」の悲しむべき状況である。すなわち、韓国教会が

「間断なき分裂や葛藤」によつて「混乱と苦しみ」の中にあり、また「社会から不信や指弾を受けて」「地域の福音化や世界宣教にとつて躓きとなつてゐる」という現況のことである。その要因として、本命題の解説では韓国教会の四つの問題点が象徴的に列挙された。すなわち「物量的成長主義、利己的各個教会主義、排他的教派主義、変則的な教会の世襲」である。本命題の解説では、こうした状況やその要因が他人事としてではなく、むしろ「われわれ」自身のこととして受け止められている。それ故に「過去と現在を反省」し、「世界の諸教会の連合と一致」のために尽力すること、そのための「運動にも積極的に参与」することが「使命」と自認され、その「使命に全力を尽くす」と決意されたのである。

「使命」については、「諸教会の連合と一致」のために尽力することも、「世に向かつて神の愛を宣べ伝え」「穩健かつ全的な福音を具現する神の宣教」を成し遂げるためという位置づけがなされている。長神大の神学は、WEA (World Evangelical Alliance 世界福音同盟) の福音主義的価値観を重視すると同時に、WCC (World Council of Churches 世界教会協議会) のエキュメニカルな価値観をも支持するものである。その神学は、「神の宣教」に基づく教会論と宣教論を志向する統一的姿勢が明瞭である。

第6命題…われわれの神学は、韓国教会の危機に向かつて積極的に対処し、その危機を克服する

ための教育に力を尽くす。

第6命題の核は「教育」である。それは、特に韓国教会の危機への対処と危機克服のための「教育」であり、神学がその教育に尽力することが眼目となつてゐる。背景にあるのは、韓国教会に対する総体的な「危機」意識である。それは「韓国の未来」に対する危機意識にもつながつてゐる。すなわち、「教会成長の停滞」、「牧会者の道徳」問題、教会の「社会的影響力の減少」により、質量共に困難に陥つてゐる韓国教会の状況が、教会の未来のみならず「韓国の未

来」をも暗くしていると意識されているということである。教会の未来が国家の未来に影響するという考え方は、韓国のキリスト教界全般に広くみられる特徴の一つである。

本問題に至って、視点は神学の社会的責任や実践の重要性から「教会」ならびに教会と神学校における「教育」へと転回する。解説では、まず長神大の神学が「教会の神学」であると同時に「教会のための神学」であることが確認される。教会の危機は神学の危機であり、また神学教育の危機でもある。長神大は、まさにその部分に自ら切り込んだ。すなわち、「現在の韓国教会の危機」は「神学校と神学教師」である自分たちの危機なのであり、自分たちにその責任があるという認識である。それゆえに、本問題の解説においては「悔い改め」の言葉が明記された。

われわれは……韓国教会の危機が……神学校と神学教師にも責任あることを認め……これを悔い改める……神学校がこの危機に対しておつてきた受動的かつ消極的な姿勢を脱皮し、積極的にこれに対処し、危機克服のための神学教育へと邁進することをここに闡明する。……何よりも神の言葉に根ざしたイエス・キリストの弟子を養成し、知と生とが一致するような人格を高め、学問と現場が分離しない神の国の働きの人を立て、信徒たちの信仰と生活に変化を起こすような実働的力を備えた牧会者を養育し、これを派遣する神学教育を追求する。そのために、われわれは……神学教師としての召命と使命と献身とを、ここに新たにしようとするものである。

長神大の神学は、他者批判に先立って自己批判をし、自ら悔い改めて自他の変化と更新とを目指そうとするのである。それは単にアカデミックな学問として知的に深化・発展・展開されることに満足せず、「知と生とが一致する」ことの重要性を自覚するがゆえに、教育を神学の重要な課題として位置づけ、その線に沿って自ら脱皮し、変化し、邁進する

ことを試みようとするのである。教会の危機は神学の危機であり、神学校の危機であり、教師自身の危機であり、それゆえに教育の危機である。このことを長神大の教師たちは深く認識し、悔い改めの言葉をもって告白した。長神大の神学は、神学教師自らが悔い改めることに基づいた教育改革とその実践推進をもって、韓国教会の危機を克服していこうとするものである。

第7命題…われわれの神学は、世俗主義的文化を変革させ、神の国の文化形成とその拡散に寄与しようとするものである。

第7命題の核は「神の国の文化」である。ここでは神学による「神の国の文化」形成と、その拡大に対する寄与の重要性が主張される。背景にあるのは「世俗主義文化」であり、そこにこそこの世の問題があると認識されているのである。「世俗主義文化」の代表例として列挙されるは、共同体の秩序を破壊する「個人主義」、生命^{いのち}の商品化や人間を「存在と所有の混同」へと導く「マモンの力」、宗教に取って代わりつつある「科学技術（絶対）主義」、人間精神とその生を荒廃させ、人間に偽りの豊かさを追求させる、快樂志向的「物神主義」などである。しかし、本命題が解説において真に注目するのは、「世俗主義文化」を構成する精神性に深く染み込んでいる「人間の罪性」である。「世俗主義文化」には罪が深く浸透しているとする理解は、「世俗主義文化」を「墮落した人間の文化」として位置づけ、また「罪の結果として」「人間と被造物」を「死」へと導くものとする。本命題の解説によれば、こうした「墮落した人間の文化」は「回復」されなければならず、それを可能とするのは「イエス・キリストの贖罪による救いの恵み」なのである。「贖罪による救いの恵み」が「世俗主義文化」の克服という線上で言及される点は、本神学声明の大きな特徴である。つまり、「贖罪による救いの恵み」は、個人の魂の救いという次元においてのみ言及されるのではなく、むしろ社会的・文化的次元において言及されるのである。

「世俗主義文化」に対抗するものとして掲げられるのは「神の国の文化」である。「われわれ」が追求すべき文化は「神の国の文化」であつて、その文化は「先取りされた神の国」としての「イエス・キリストの弟子たちを通して拡げられる」ものだと表明された。「この世の文化への対案的共同体」は「キリストの体」としての教会である。本命題によれば、教会こそが「世俗主義文化を変革」させ、「神の国の文化を具現」させるべきものと捉えられているのである。「神の国の文化」は「神の国」に属するものであるが故に、それは終末論的次元に関わる。確かに、「神の国の文化」は本命題の解説においても、「イエス・キリストの到来によつて完成される」ものとされている。しかし、それはまた「地上においても具現」されるものとして捉えられてもいる。その具現と拡大を推進するべき存在は教会、すなわちイエス・キリストの弟子たちである。長神大の神学は、この世にあつて「神の国の文化」を具現するために努力し、「イエス・キリストの到来」による完成の時まで、その具現を担う「イエス・キリストの弟子たち」と、その共同体としての「教会」の形成ならびに養育に専心するものである。

IV. おわりに

「2015神学声明」は「長老会神学大学校教授一同」の名で発表された大学公認の神学声明である。その意味では、大学教授たちによる同意を得た声明であると言ふことはできよう。しかし、これが全教員から同意を取り付けた声明であると言ふことは、容易ではない。本神学声明に反対する教授も「いる」のである。長神大は大韓イエス教長老会（統合）（以下、「統合」）総会が直営する神学大学として、聖書観においても信仰観においても社会的にも政治的にも、保守から進歩まで多様な思想と性向を持つ教員たちによつて構成された大学である。実際、教授たちの中には、全学礼拝

の説教において、あるいは大学ウェブサイトの掲示板において、本「2015神学声明」に現れた立場や方向性を批判し、これに同意しない旨の発言をする人もいる。

とはいえ、本神学声明はほぼ全教員の同意を得て発表された神学声明であることにはちがいない。その作成過程は決して平坦なものではなかった。学期が終わり、休みに入ると、八〇人近くの専任教員たちが地方のホテルに集合し、本神学声明作成のための一泊二日大討論会に臨むことにもなったのである。⁽¹⁴⁾

本「2015神学声明」は諸方面に波紋を投げかけるものとなった。その波紋は、韓国最大のキリスト教教団の一つ「統合」所属の神学校や教会、また諸学会や諸メディアを通して、韓国キリスト教界全体に広がりつつある。波紋の広がりには韓国内に留まらない。本声明書は発表後まもなく、英語をはじめとした諸外国後に翻訳され、海外においても波紋を広げるものとなっている。⁽¹⁵⁾ 反響も聞こえ始めた。例えば、ドイツの神学界では本「2015神学声明」を非常に好意的に受け止める神学者たちが現れ始めた。代表的な神学者はユルゲン・モルトマン (Jürgen Moltmann) である。モルトマンは長神大の金明容総長宛ての手紙の中で、「2015神学声明」をテュービンゲン大学の神学部長から送られて知ったとし、コメントを記した。その中でモルトマンは、この声明書の一文一文を読みながら「アーメン、アーメン」と口にしたと書いている。またモルトマンは、長神大が時宜にかなった神学声明を出したことに「心からの賛辞」を送るとし、「韓国」全ての長老教会と他の諸教派が「2015年神学声明」を受け入れ、これに従い行くことを願うとまで記した。そして、手紙の最後には「私はこの神学声明を、私の名にかけて、大きな喜びをもって、全的に支持させていただきます」とまで書かれた。以下、その手紙の一部を金明容総長の許可のもと紹介することとしよう。

【モルトマンから金明容総長への手紙】

2015年長老会神学大学校神学声明を読んで

テュービンゲン、二〇一五年一〇月二九日

敬愛する総長殿

(省略)

長老会神学大学校が八月一日、韓国の光復節に公开发表した「2015年「長老会神学大学校」神学声明」を、私は今しがた読みました。私どもの大学「ドイツ・テュービンゲン大学神学部」の学部長が、この声明書を私に送ってくれたのでした。

この神学声明書の一文一文を読みながら、私はその都度「アーメン、アーメン」と申しました。このような、すばらしくまた時宜適切な神学声明を出されたことに心からの賛辞をお送りいたします。「神の国の文化」という表現はきわめて適切です。このような文化こそが「今の」世俗社会においては真に重要なものでありましょう。「声明書において明らかとなった神の国の文化は」教会の弱い部分の急所に触れるものでした。この指摘は穏当なものですし、またそれは癒しへと向かう「切迫した」叫びとも思われます。

ぜひとも、「韓国」全ての長老教会と他の諸教派が「2015年神学声明」を受け入れ、これに従っていく

ことを願います。私はこの神学声明を、私の名にかけて、大きな喜びをもって、全的に支持させていただきます。

丁重にご挨拶申し上げます

ユルゲン・モルトマン

「2015神学声明」は、モルトマンが上記のような賛辞と支持をもって受け入れた神学声明である。モルトマンが「2015神学声明」を支持した理由は、彼の神学の統全的〈holistic〉性格と長神大の神学の統全的(holistic)性格が多くの共通点を持つところにあると推察される。われわれが見るところ、実に「2015神学声明」自体がモルトマン神学から大きな影響を受けて作成されたものである。¹⁶⁾そこに現れた神学は、今や長神大を中心にして、金明容総長を提唱者とする「オン神学(Ohn Theology)」¹⁷⁾をもって強力に展開されつつある。

「2015神学声明」全体に見出される神学の統全的(Ohn的)性格とその方向性は、諸方面から批判にさらされてもいる。WCCを敵視する保守陣営からは進歩的と批判され、聖書の正典性に消極的な進歩陣営からは保守的と批判される。それはアイデンティティが明確でなく、何でもありの玉虫色との評価を受けることもある。しかし、そうした批判や評価の全てに耳を傾け、真摯に受け止め、自己修正していかうとする姿勢が「2015神学声明」に現れた統全的(holistic-Ohn)神学にはある。「2015神学声明」は、このような神学に基づいて作成され発表されたものである。今後の韓国神学界において、また世界の神学界において、本声明が今後どのように受け止められ、評価され、またそれ自身展開していくことになるか、筆者もその作成に参加した者の一人として期待しつつ、その展開のただ中に身を置いて見守っていきたい。

注

- (1) ここに掲げた「2015年長老会神学大学校神学声明」全文は、『福音と世界』二〇一五年二月号（新教出版社、二〇一五年）四七―五七頁に掲載された拙訳に、若干の手を加えたものである。
- (2) 例えば、二〇一五年十一月に開催された「日韓神学者学術会議」の様子は、「第5回日韓神学者学術会議、金明容・清水博士発題」と題されたオンライン新聞の記事で紹介されている。記事は次のサイトで確認できる。오리온(エイ・ミギョン)「제5회 한일 신학자 학술회의… 김명용・시미즈 마사-팔제」(오리온신문, 2015.11.20) <http://www.christiantoday.co.kr/articles/287215/20151120/제5회-한일-신학자-학술회의...김명용-시미즈-마사-팔제.htm>
- (3) Ⅲ―『2015年長老会科学大学校進学声明』の内容と評価」で後述するように、ユルゲン・モルトマンはドイツ・テュービンゲン大の神学部長を通して本神学声明を知ったとし、その内容を非常に高く評価している。
- (4) 以下のA、B、Cについては、ナグネの博士論文（未刊行）『독립교회운동의 역사와 신학』(독립교회운동의 역사와 신학)〈モルトマン神学と韓国神学〉(Seoul: Presbyterian University and Theological Seminary, 2011) のD-3-b)-1), 2), 3) に詳しく、本稿もその部分に負っている。
- (5) 一九八五年の「長老会神学大学神学声明」は、『基督公報』(一九八五年九月一〇日付)に掲載された。
- (6) 김명용〈金明容〉『독립교회신학〈統全的神学〉』(Seoul: Presbyterian College and Theological Seminary Press, 2004) 114. 「長老会神学大学声明」については『長神論壇』創刊号 (Seoul: Presbyterian College and Theological Seminary Press, 1985) p.9-14を参照のこと。
- (7) 『長神論壇』창간호〈創刊号〉, 8쪽.
- (8) 김명용〈金明容〉『독립교회신학〈統全的神学〉』115쪽.
- (9) “장로회 신학대학교 신학교육정명을 위한 기초문서〈長老会神学大学校神学教育声明のための基礎文書〉,” 『교회와神學』

- (10) 同様の点を、長神大教授申玉秀(シン・オクス)も指摘している。すなわち、「イエス・キリストの福音伝播と神の国の具現」という本基礎文書教育理念が二つの軸によって構成されているという点、ならびに一般的に前者を強調する福音主義神学の立場と後者を強調するエキュメニカル神学の立場を本基礎文書が共に包容しているという点である。신복자(申玉秀), 『영광의 나라를 위하여』(『神の国のために』), 『한국교회와 세계』(『韓国教会と世界』), 2010. 11, 25쪽. なお、申玉秀は同論文脚注107において、「イエス・キリストの福音伝播」と「神の国の実現」を楕円の二つの焦点とする尹哲昊(ユン・ Cholho)の主張を紹介している。この主張については, 신복자(申玉秀) <尹哲昊> 『영광의 나라를 위하여』(『神の国のために』), 『한국교회와 세계』(『韓国教会と世界』), 2010. 11, 25쪽. 参照のこと。

- (11) 「21世紀長老会神学大学校神学教育声明書」1쪽.

- (12) 実際、「21世紀長老会神学大学校神学教育声明書」について、金明容は一言で「統全的神学によって方向づけられている神学声明といえる」と評している。김명용(金明容), 『한국교회와 세계』(『韓国教会と世界』), 115-116쪽.

- (13) 以上の部分は、拙訳「2015神学声明」の掲載された『福音と世界』二〇一五年二月号(新教出版社、二〇一五年)五一頁の「訳者解説」に若干の手を加えたものである。

- (14) 「2015年神学声明」の作成過程は決してスムーズなものではなかった。その作成過程を知るための資料としては、二〇一五年六月十一・一二日に韓国江原道のソルビーチホテルで開催された全専任教員参加の大討論会で配布された資料が参考になる。『한국교회와 세계』(『韓国教会と世界』), 2015. 6. 11-12. ならびに「2015-1학기 교수학습회의 신학정책 관련 회의」(2015-1学期末教授会神学声明関連会議)」자료를(資料) (2015년 6월 11일)。

- (15) 日本での波紋については、拙訳による全文が新教出版社の『福音と世界』二〇一五年二月号、四七―五一頁に掲載されて以降、徐々に広がりつつあることが体感される。その反響の最たるものは二〇一六年七月一日に聖学院大学総合研究所主催の「第一回組織神学研究会」において本声明に関する発表の機会が与えられたことである。本論稿は、その時の発表を基としている。その後も、本声明は『福音と世界』二〇一七年七月号所収の拙稿「危機意識と行動」(三〇―三五頁)に

おいて取り上げられている。

(16) 長神大神学に対するモルトマン神学の影響については、筆者の博士論文（未刊行）、*이윤성*（洛雲海）『*한국교회와 오순절 운동*』（*Seoul Presbyterian University and Theological Seminary*, 2011）に詳しい。

(17) 「オン神学」については、『福音と世界』二〇一五年一月号掲載の拙稿「韓国教会通信7 オン神学 (On Theology) 運動が始まった」を参照のこと。また同誌二〇一六年一、二月号にその一部が訳出されている。併せて、本神学声明の背景について記した『福音と世界』二〇一五年二月号掲載の拙稿「韓国教会通信12 韓国教会と神学の行方」も参照のこと。なお、金明容の著書『オン神学』の邦訳は間もなく新教出版社から刊行される予定である。